

しずおか平和の風

No20
2016年12月25日
発行
静岡市
平和委員会
静岡市葵区鷹匠
1-5-8
TEL 253-1854
FAX 252-0785
メール
Peace-City
@mail.707.to

11月23日、静岡市平和委員会として、久しぶりのフィールドワーク「平和学習in東京」を実施、靖国神社と江戸東京博物館を訪れました。

参加者は、バスの

定員いっぱい25名。曇り空の寒い一日でしたが、靖国神社の本質に迫る学習ができました。ガイドは、新宿平和委員会の松山さんとアシスタントの川崎さん。神社の境内1時間半、遊就館内1時間半という合計3時間にも及ぶ見学でしたが、それでも時間が足りないと思わせるほど内容の濃い学習ができました。

人間を神にする装置＝靖国神社 静岡市平和委員会久しぶりのフィールドワーク

戦地から死者の魂を呼び寄せる新旧2か所の招魂斎庭や遊就館の特異な戦争観(やむにやまれぬ戦争)が、天皇の側に立つて戦った人(のみを祀るなど)による展示などから靖国神社の本質を見ることができました。

帰りのバスで「一人ではなかなか見学する機会がない。来てよかった」「靖国とは日本を戦争ができる国にするための神社だ。靖国神

社の本質が分かった」「ガイドさんの説明があったからよくわかった。若い人たちも見学していたが、普通の人々が何も聞かずに見学したらどうなるでしょう」となどの感想が語られました。

昼食後は、江戸東京博物館。東京大空襲を映像で見ると、10万人もの人たちが殺された実態をつかみ、参加者はあらためて戦争の恐ろしさを感じました。(合戸 政治)

感想 榎本 仁

初めて靖国神社に行ってきた。行く前一番興味があったのは遊就館の展示についてでした。「日本の戦争

はアジア解放のための正しい戦手だった」というテーマに貴かれています。予想していませんでした。しかし、実際見学してこれほどまでに「日本の戦争の正当性」を主張している施設だとは思いませんでした。戦後いくつものアジアの

招魂はすでに行われず、今は駐車場になっていました。これが靖国神社・遊就館の本質だと思いました。

感想 藤原 玲子

靖国神社、そして遊就館に行っただのは初めてだった。そこには戦時中の天皇中心の思想、社会が現存していた。歪められた歴史、天皇のために殺された尊い命を神と祀る。日本国憲法を制定し、過去のものになっただけのその精神を崇拜する日本会議や政治家が今も国を動かす、平和憲法を踏み違えていることに体が震える。だが、それを許しているのは、私たちの投票であることに立ち還らなければならぬ。



←靖国神社のシンボル大鳥居

つむじ風

アリゾナの涙

年末に安倍首相はハワイ真珠湾を訪問すると発表した。安倍首相によれば、「戦死者を慰霊し、未来に向かって不戦の誓いをする」ためだそう。政府高官は「謝罪はない」と言っている。

1941年12月8日(日本時間)、日本の航空部隊の攻撃によって、戦艦アリゾナをはじめとする米太平洋艦隊の主力が壊滅した。この攻撃によるアメリカの犠牲者は2403人、日本の戦死者は64人だった。正式な通告前の攻撃だったということで、「リメンバー・パールハーバー」という声は根強い。

安倍首相の訪問するアリゾナ記念館は、沈没したアリゾナの真上に立っている。アメリカの犠牲者の約半数1102人はアリゾナ乗組員だ。航空写真では、記念館の下の海中にアリゾナのシルエットが見える。それを見たとき、中国撫順の平頂山惨案記念館を訪問した時のことを思い出した。平頂山記念館も殺戮現場の真上に建てられている。私たちは、虐殺の犠牲者の骨の上を通った。戦死したアリゾナ乗組員の遺骨はどうなっている？ アリゾナからは、今でも重油が漏れ出ているという。「アリゾナの涙」「黒い涙」と言われているようだ。

私は、真珠湾の犠牲者に対して、日本を代表する現職職総理大臣として、謝罪すべきだと思う。(合戸 政治)



在籍したのは教員養成大学、必修の教育実習で先生の大変さを知り怖気づいてしまった。私には無理……。ところが取得した教員資格を、皮肉にも移り住んだ異国の地で活かす、教壇に立つことになった。在米25年、アメリカ人の夫、二人の息子をもち、今は総領事館に勤めている。かたわら、土曜日だけ開校の日本語補習校に勤めだして2年目、6年生の担任になった。42歳の新人教師は、とにかく基本に忠実を心がけた。その教材のひとつに、原爆や戦争にまつわる情報を集め、それをもとに小論文を書く、『平和の砦を築く』原爆ドームが語るもの』があった。

『平和の遺伝子』(2) 平和文集はこうして始まった

平和教育？小学6年生が小論文？自分が小6の時、そんなことをやっていたっけ？随分難しいテーマだけど、どこまでできるだろうか？等々おおいに戸惑ったが、大学では国語科専修だった私は、日頃作文指導に力を入れていたこともあり、このプロジェクトに飛びついた。子ども達は聞き取りなどもして熱心に取り組み、思いのほかしっかりしたレポートを出してくれた。こんなに懸命に書いた作品を独り占めするのは惜しいと思った。そこで、保護者を招いてクラスで作文発表会を開いたところ大好評。戦争と平和の問題をテーマに、親子が語り合う光景をみて感動した。調子に乗って、その場でこれを文集にするので、自分の子供の作品に対する感想を書いてくださいとお願いした。

2010年、こうして親子合作の第1号が出来上がった。

佐藤 暁子(アメリカ・ヒューストン在住)

日向から寺島へ
嫁にきました

日向から寺島まで歩いて二時間。バスが通っていないからで、町へ行く時はトラックの上の材木の上に材木を締め細引きにしがみついて乗りました。

静岡市の女性の戦中・戦後のくらし(後半)

— 山本 志げ (86歳) —

いつ振り落とされるかわからない高い所です。

母からいつも「お前はこの家で生まれただけで、この家は兄弟夫婦の家だから嫁にもらいてきたら、出て行けよ。」と言われつつきました。昭和二十六年二月二十二日。私は二十一歳。

朝から近所の人達が来、ごちそうを作り始めました。こんぶ、椎茸、人参、ごぼう、蓮根、赤飯、大根のなますなど、畑でとれた物ばかり。床の間には陽明寺の和尚さんが梅の花を活けてくれました。

隣のおじさんが大根で鶴、人参で亀、緑の野菜の葉の上に飾ってくれました。私は朝から髪結いが来て、島

田まげを結ってもらいました。嫁入りの着物は母がお米と交換して支度してくれました。近所の人達がお祝してくれました。午後、寺島からトラックでお迎えが五人来ました。

屋敷に着いて酒を注ぎ、固めの盃をして、仏間から二度ともごつてこないように、迎えのトラックに運転手の横に座りました。他の人は荷台に乗り、寺島の家に着きました。

夫はどんな人か、話もしたこともありません。世話人だけが足繁く来ました。不安があったけれど、親の嫁に出したい気持ちばかり、何もわからず、覚悟しました。この人を早く好きにならなければ、と努力しました。今でも好きになれない人です。本人は「おかあさん大好きだよ」と、いつも甘えています。だが、三人の子どもの父親だからと、介護に忙しい毎日です。

長男が高校へ行けなかった理由

姑と父親が百姓やるには高校は出なくてもやれると言いました。私は後悔すると言ったが聞かれなかった。三十歳になり、嫁を世話をしてくれる人もありませんが、あんな親父では来てくれない不幸になるから、何回た

のんでも断り、か

なしかったです。「親父が土下座して『お前がいなければ、この家はつぶれる』と涙を流して頼まれ、出て行けなくなると話しました。

長男が中学の頃は百姓もほどほど良かったが、今はやっていけないようになってしまいました。

海外旅行

長男が私も一緒に連れていってくれました。

中国三峡下り、イタリア、フランス、スイス、ドイツ、台湾、カンボジア遺跡。どこの国も素敵な街でした。心に残ったのはアンコールワットでした。神を祈り、身を捧げ、造りあげた魂のごもった姿に古代人のすごさに感動しました。日本人の書いた文字も薄く残っていました。周りはジャングルに囲まれています。カンボジアの人は親切でした。



棒切れ振り振り

負けん気な男

負けて来ると男は、誓って国を出たからは手柄なんぞ知るものか、退却しっぱ聞かぬに、ごんごん迷ひ出す男も、

勝つて来ると男は、誓って国を出たからは手柄なんぞ知るものか、退却しっぱ聞かぬに、ごんごん迷ひ出す男も、

露営の歌

勝つて来ると男は、誓って敵陣を出たからは手柄なんぞ知るものか、退却しっぱ聞かぬに、ごんごん迷ひ出す男も、

出典『昨日生れたブタの子が』

昨日生れたブタの子が

昨日生れたブタの子が、ハチに刺されて名譽の戦死、ブタの遺骨はいつ帰る、昨日の夜の朝帰る、ブタの母ちゃん悲しがる

昨日生れたブタの子が、ハチに刺されて名譽の戦死、ハチの遺骨はいつ帰る、八月八日の朝帰る、ハチの母ちゃん悲しがる

湖畔の宿

昨日生れたブタの子が、ハチに刺されて名譽の戦死、ブタの遺骨はいつ帰る、昨日の夜の朝帰る、ブタの母ちゃん悲しがる

私と兄二人、フィリピンで亡くなりました。イヤだねえ、老女性私の差し出すチフスを受けとりつつ、つぶやきました。

(2016年12月14日) 過去71年このことを知らずにきた私たちです。

昭和18年12月10日、遠州、太田川沿いの小さな村の学校の校庭。二宮金次郎の銅像近くで、父親の出征壮行会で、朝礼台に立った父をぼんやり見ていました。すぐ破れる半紙の真ん中に茶碗を伏せ、丸くクレヨンで赤く塗り、紙の端に米粒をのばし、竹の棒につけた日の丸を振って

いました。

三〇歳にもならない母と小学一年の少年、二歳の弟この夜をどう過ごすかということより、麦の種まき、稲の脱穀、初すいの中途で出征する父のあとの明日からの家の仕事に心配だったので。野良の仕事の重さ、三人の家庭の寂しさ、を想像も考へることなく、私たちは73年を経てきました。

“死んで還れ”なんて目の前に立つ父にどうしてさうしようか。少年の目には校庭は広かった。そこに国民学校初等科、高等科の児童、生徒、青年団、婦人会

の人々が校庭を埋めていました。少年の心は上の空です。近くの袋井駅まで見送ったはずですが、今も小さい駅ですが、ごんごん見送ったか、80歳すぎた昔の少年には全く記憶にありません。当時「少年」だった私より、寂しさを、辛さを表現できなかった弟の心中を私は想像するのです。ガキ大将は棒切れを振り振り、竹やぶでは竹一本一本を棒でたたき、野の草の花、穂をたたき切り遊びました。杉の木に登り、竹に移り、落下傘と称し、しなる竹にぶら下がり、地上に立つのでした。替え歌が棒切れにあっていたのか、棒切れが替え歌をよび込んだのでしょうか。

だれにも教わったわけでもないのに、教本があったわけでもないのに、同じ詞でうたったのです。やむを得ずうたったのは、左の笹木本です。岐阜県の村々でもほとんど違わない詞で、これらの替え歌がうたわれていたことなのです。

そして、その口にはこの替え歌をうたった私どもの口も見える、調べあげていた目のあったことです。(鈴木)



『昨日生れたブタの子が』
CDブック
戦争中の子どものつた
音楽センターあけび書房
編者 笹木透(岐阜県恵那郡)
1937年生まれ